

# 令和5年度 地域活性化活動助成事業 活動概要

光市立室積中学校

## 1 活動名 みたらいアートプロジェクト

## 2 活動の背景

本活動は、昨年度初めての試みとして、室積西ノ浜の防波堤に壁画を制作して地域の魅力発信を行ったプロジェクトである。室積海岸が日本一の海岸になるようにという願いのもと、小中学生や地域住民が一体となり、昨年は室積マスコットキャラクター「むろぞう」や室積の自然の豊かさの象徴である「クサフグ」をペンキで描いた。初めての活動に苦労しながらも、全員が楽しみながら、笑顔で取り組むことができた。ペインティングした防潮堤は、人通りや車の通行の多い所にある。完成した壁画を目にした地域住民の方からは、「彩りが出てすごくいい」という声が寄せられ、室積らしさが感じられる場所になった。

そこで、今年度もさらなる地域の活性化をめざし、子どもたちや地域住民が一体となって、地域をよりよくし、また、室積地区の未来を考える人づくりや地域の絆の結びつきを強めるために、本活動を実施した。

## 3 活動の内容

令和5年11月5日(日)、小中学生15名を含む総勢約30名が参加した。持続可能な社会(SDGs)をテーマに、地域の魅力や誇り、また、わたしたちの地域がこうなってほしいという未来図をペインティングすることにより、室積地区の海岸が日本一の海岸エリアになるような取組を発信していくことをめざした。



ペインティング前の防波堤

下絵の段階です。およそ3時間後には、この防波堤に室積の魅力を伝える素晴らしい壁画が描き出されました。



主催者のあいさつ

活動の主催者である地域の方から、本プロジェクトへの思いを語っていただきました。皆、真剣に聞き入っていました。



真剣なまなざしの子どもたち

小中学生が、丁寧にペンキで描いています。小学生に教える中学生の姿も見られ、小中地域が一体となって活動できました。

### 壁画デザインについて

#### 「みんなでチェックリ」

今年度、室積小学校は創立150周年を迎え、年間を通して様々な記念事業に取り組んできました。その中の一つとして、みたらいアートプロジェクト絵画コンクールがある。室積まちぐるみ協議会が、創立150周年を記念して防波堤の壁面に描くデザインについて、

5・6年生を対象に作品を募集した。画題は運動会で地域の方々も参加した「チェッコリ玉入れ」（“玉入れ”と“ダンス”を融合させた競技）である。応募のあった23点の中から最優秀賞に選ばれた作品「みんなでチェッコリ」が今年度の壁画のデザインとなった。



壁画「みんなでチェッコリ」

室積小学校150周年を記念して実施した運動会の競技です。この絵は6年生児童が描いたものです。みんなが笑顔で楽しんでいるのが印象的です。



壁画「だるま夕日」

室積海岸から見える夕日を描きました。海や空のグラデーションの部分に苦戦しながら、美しい室積の情景を描くことができました。

### 「だるま夕日」

室積海岸では瀬戸内海に沈む「だるま夕日」が有名である。冷たい大気と暖かい海水の温度差で海面に水蒸気が発生し、太陽光が屈折するのが原因で、だるまのような形に見えることから、このように呼ばれる。晩秋から春先にかけて観測される、室積の冬の風物詩である。だるま夕日は、シーズン中でも必ず観る

ことができるわけではないため「幸運の夕日」とも言われる。

## 4 活動の成果

室積まちぐるみ協議会の方々をはじめ多くの地域の皆様のおかげで、劣化した防波堤のリニューアルにより、室積のよさをアピールする取組が実現できた。

子どもたちにとっても意義深い活動であったと思われる場面が多く見られた。最初は、画用紙に絵の具で塗ることとは違って、凹凸のあるコンクリートにペンキで塗ることに悪戦苦闘していた子どももいた。しかし、次第に慣れ、気づけば没頭している真剣な姿があった。また、同じ色でも塗り方一つで一人ひとりの個性が表れ、参加した人にしかわからない醍醐味が感じられる作品ができた。さらに、たとえ失敗しても子どもたち同士で補い合ったり、励まし合ったりしながら、人と人とが関わり合うことで得る楽しさを感じることもつながった。参加した子どもからは、「みんなで協力して描いた絵を見て、多くの人が笑顔になったり、すごいと思うくださったりするとうれしい」という感想を聞くことができた。



完成した壁画の前で記念撮影

室積の象徴である海と晴れ渡る空を背景に壁画とともに記念撮影をしました。予想以上に時間がかかりましたが、参加した子どもたちは達成感に満ちていました。

## 5 今後に向けて

本プロジェクトは昨年度より取り組み始め、まだスタートしたばかりである。実践の積み重ねにより、いかに持続可能なものとするかが今後の課題である。ボランティアとしての参加者も、毎年同じ子どもたちではなく、より多くの子どもたちに経験してもらうことが、地域の活性化へ主体的に関わろうとする意識を高めるために必要であると考えている。